

市立舞鶴市民病院

令和6年1月21日
地域医療シンポジウム資料



市立舞鶴市民病院の歴史



(旧舞鶴市民病院)

1. 地域の基幹病院として発展

- 1940年(昭和15年) (財)海仁会病院として、旧海軍の軍人及び軍属の家族を対象とする病院として創設
- 1947年(昭和22年) 市立舞鶴市民病院として開設【一般病床70床、結核病床50床】
- 1984年(昭和59年) 24時間救急医療体制の実施 ※1969年(昭和44年)救急告知病院認定
- 1990年(平成2年) 自治体立病院優良病院として自治大臣表彰【209床】

2. 大きな転換期 **昭和から平成へ** 地域医療を取り巻く環境が変化 ⇒ 市外医療機関との競争激化、少子高齢化、人口減少etc
経営改善を図るため、一部療養病床への転換、介護療養医療施設の指定、総合内科から専門診療科への移行などに
取り組むも・・・

- 2004年(平成16年) 内科医師の集団退職【14名中13名が退職】
→ これに伴い、病院として機能停止の状態が数年に及び、累積赤字の拡大とともに地域医療の混乱を招き、
これが結果的に、**本市地域医療のあり方を議論するきっかけとなる。**



2007年「舞鶴市地域医療あり方検討委員会」設置 2009年「舞鶴市公的病院再編推進委員会」設置 ⇒ 「中丹地域医療再生計画(案)」提出

- 2012年(平成24年)
選択と集中、分担と連携を基本コンセプトとする「**新たな中丹地域医療再生計画**」が承認され、これにより
当院は**医療療養型病院へ移行**

3. そして現在

- 2014年(平成26年)
舞鶴赤十字病院に隣接する現在地に、医療療養型病床100床に特化した医療療養型病院(外来なし)として新築・移転

市立舞鶴市民病院の現状

1. 病院の概要

【基本的事項】

開設者	舞鶴市長
病院長	井上重洋
病床数	医療療養型病床100床
診療科	内科・リハビリテーション科
附属施設	加佐診療所

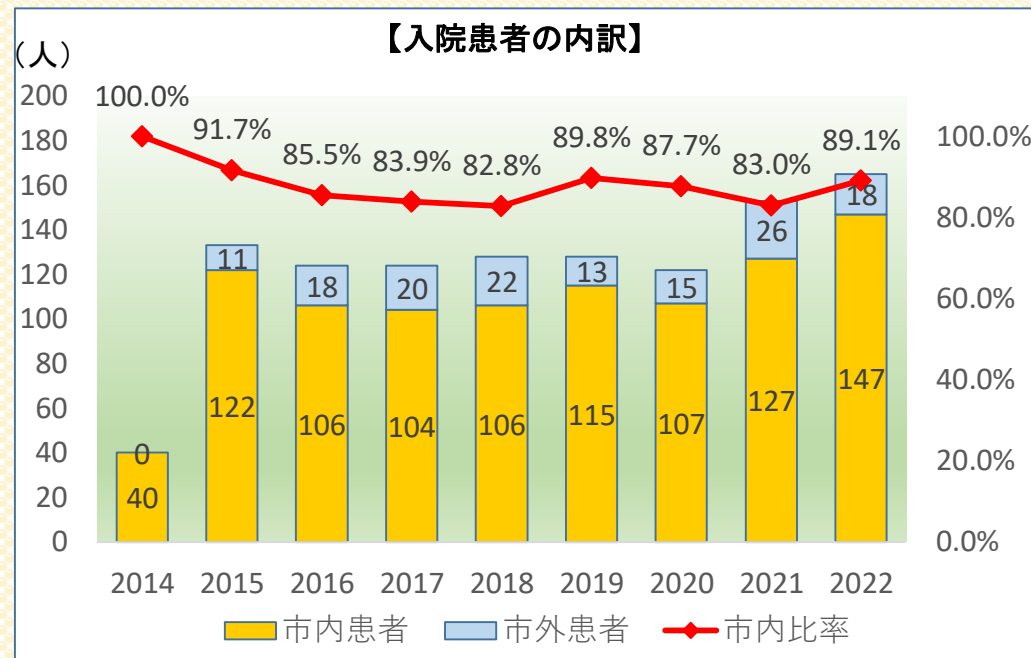
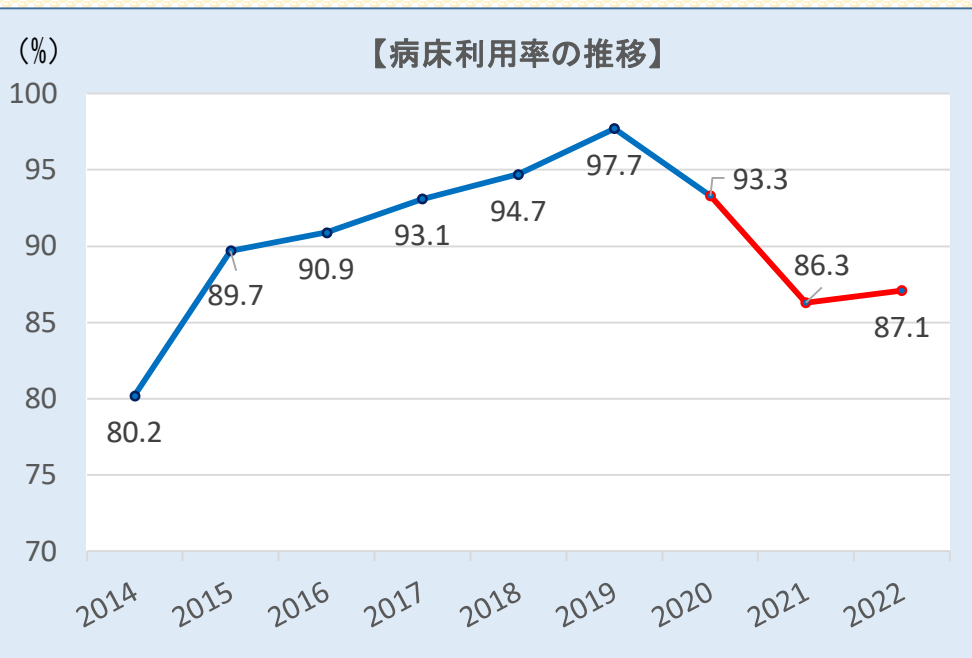
【職員体制】

※()は会計年度職員で内数

医師	5 (4)
看護師	58 (19)
看護助手	19 (10)
医療技術	10 (2)
事務職員	19 (11)
その他	1 (1)



【入院患者の状況】



市立舞鶴市民病院の役割

➤ 現在の市立舞鶴市民病院について

- ◆「新たな中丹地域医療再生計画」においては、療養病床に特化した病院として、急性期・回復期と連携により地域の慢性期の医療ニーズへの対応を担うことが期待されている。
- ◆市内公的3病院のバックアップ機能を果たし、在宅からの入院を含めると**80割以上が市内から**、綾部、福知山からの患者を含めると**約9割が中丹医療圏の患者**が占めている。
- ◆附属施設である加佐診療所は、へき地医療を担う医療機関として地域住民の期待は大きい。
- ◆地域包括ケアの推進においても「医療」と「在宅」を繋ぐ架け橋の役割を担う。
- ◆療養病床に特化した自治体病院は全国的にも珍しく、安定した地域医療体制を維持する観点からも存在意義は大きいと自負しているところ。
- ◆病院機能としては療養病床に特化、一般外来は行っていない。



急性期病院と連携のもと慢性期医療の分野から地域医療を支える

市立舞鶴市民病院の課題

- 病院規模が小さい。
 - ① 病床稼働の変動や退職者の発生が、即、経営、病棟運営に影響する
 - ② 医療資源を入院患者に効率的に集中させることができる一方で、収益の大半を入院収益が占めることから経営基盤が不安定
- 慢性期100床に特化しており対策が限られる。 → 感染症への対応等
- 医師数が限定される。
- 看護助手の確保 … なり手不足の上、老健、介護施設と競合
看護師の過密労働の一因にも
- 検査技師や薬剤師、リハビリテーションなど診療支援部門の人員面での安定
- 認知症患者、要食事介助者など濃厚な介護を必要とする患者が増加傾向にある。
- コロナ後も病床稼働が戻らず経営環境は厳しさを増す。